

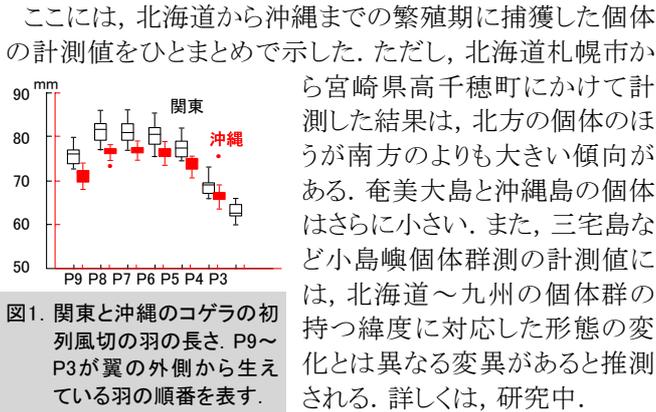
# コゲラ 英: Japanese Pygmy Woodpecker 学: *Dendrocopos kizuki*

## 1. 分類と形態

分類: キツツキ目 キツツキ科

- 全長: 約15cm
- 翼長: ♂76-88mm ♀79-91mm
- 尾長: ♂42-57mm ♀46-57mm
- 露出嘴峰長: ♂13.5-17.2mm ♀14.5-18.7mm
- ふ蹠長: ♂13.4-15.7mm ♀13.7-16.3mm
- 体重: ♂17.8-22.8g ♀19.3-26.4g

※全長は吉井(監)1988, その他は日本での著者による繁殖期の測定値



ここに、北海道から沖縄までの繁殖期に捕獲した個体の計測値をひとまとめで示した。ただし、北海道札幌市から宮崎県高千穂町にかけて計測した結果は、北方の個体のほうが南方のよりも大きい傾向がある。奄美大島と沖縄島の個体はさらに小さい。また、三宅島など小島嶼個体群測の計測値には、北海道~九州の個体群の持つ緯度に対応した形態の変化とは異なる変異があると推測される。詳しくは、研究中。

羽色: 雌雄ほぼ同色で、雄の後頭部側面には数枚の赤羽があるが、見えないこともある。背面、翼とも、やや褐色味をおびた灰色と白色の斑状模様をていする。腹面は白色部分が多く、背面と同色か褐色味の強い縦斑がある。白い眉班がくっきりとしていて、嘴は黒い。幼鳥は、尾が短く、嘴の合わせ目が黄色味を持ち、羽毛の斑がわずかにぼんやりしている。

形態と同様に、地域個体群による変異があり、北海道の個体は白色部が大きく、南へ行くほど白色部が減少し暗色に見える傾向がある。



鳴き声: ギー, ギギギ, あるいはヅィーイ。キツ, キキキキキなどの声を出す。おだやかなギーは、つがいや家族などの個体間の確認の鳴きかけのような機能, 強いキッキの声は、自己主張のような状況で用いられる。

## 2. 分布と生息環境

分布: 日本列島周辺の、島嶼と朝鮮半島, 中国の東部の狭い範囲に分布する。日本列島周辺ではカラフト島の南部, 南方は沖縄島まで繁殖が確認されている。西表島にも生息情報があるが、繁殖・生息密度・個体数などは未確認。本州に近く森林のある佐渡島, 伊豆大島などには生

息していない。日本産鳥類目録(2001)では13亜種に分けられている。

生息環境: 落葉広葉樹林, 常緑広葉樹林, 亜寒帯針葉樹林, 針広混交林など, また都市緑地から自然林まで広い範囲の森林で繁殖している。

## 3. 生活史

月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

非繁殖期 繁殖期 若鳥移動

巣: 主に生きた木の枯枝に、入口の直径約3cm, 深さ15cm余りの巣穴を掘る。毎年、新しい穴を使う。巣材はほとんどなく、わずかに木くずが残っていることはある。雌雄とも掘るが、雄の方が多い。



卵: 長径 18~20.3(平均18.9)mm, 短径 12.5~15.3(平均14.5)mm, 重さ約2g, 白・無斑

抱卵・育雛期間:

1日1卵, 早朝に産卵する。主に東京都内で調べた結果では、一腹卵数は2~5卵で、3, 4卵が多く、3卵が最頻値だった。最後の産卵後に抱卵を始め、抱卵期間約14日, 巣での育雛期間20日余り, 雌雄ともに抱卵, 育雛するが、雄の頻度が多めである。

巣立ち後: 若鳥は、1ヶ月以上親鳥のもとにとどまる。翌春3月まで親鳥の縄張りにとどまっていた若鳥



も観察されているが、2~3ヶ月でいなくなる場合が多い。生後1年目から繁殖記録がある。若鳥の分散行動は不明だが、東京都の石神井公園で、巣立った木から約130m離れた木で1年目に営巣した雄の記録がある。

## 4. 食性, その他

節足動物(昆虫類, クモ類等)を多く食べ、植物の種子(ヤマウルシ・ヌルデ・ミズキの漿果等)も食べる。主に、樹木の枝や幹, 葉の表面, 樹皮の内側, 材に穿孔している昆虫類などの無脊椎動物を、つまみぐいや材に小さい穴をあけて採食する。小さいカゲをくわえていた観察例があり、捕食している可能性がある。

## 5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

### ● 等しい役割分担と緊密なつがい関係

つがいを同時に捕獲して計測した結果では、ほとんどのつがいで雌のほうが大きかった。ふ蹠長, 翼長, 体重など、多くの計測値で雌が雄よりも大きい。雄の特徴である後頭部側面の赤い羽毛は小さく、数本しかないので、野外観察

では見えない場合もある。雌雄の形態差が小さく、卵を作る雌が大きいことは、雌雄共同で比較的似た役割分担をして繁殖活動を行う特徴と関連していると考えられる。つまり、雄のつくる精子に比べて大きな生殖巣である卵をつくる雌のほうが大きいことは、生物学的には当然で、有性

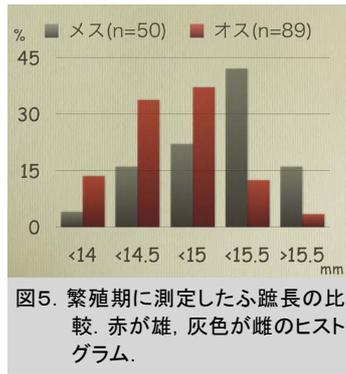


図5. 繁殖期に測定したふ蹠長の比較。赤が雄、灰色が雌のヒストグラム。

生殖する種では実際にそのような生物が多い。雄同士の体力勝負の争いなど繁殖成功に体力が効く場合に雄が大きくなるが、コゲラでは重要な性質ではないと推測される。

つがいになっているときには、ねぐら入り、巣穴掘り、抱卵、抱雛などの時間を除くほとんどの時間、雌雄が近くについて一緒に行動している。おだやかなギーギーという声を絶えず出しており、その声でコゲラを見つけることが多いし、発見しやすい鳥である。この声はつがいどうしが「ここにいるよ」と確認しあっている役割があるようだ。巣立ちした若鳥を同伴している家族群でもこの声が使われる。

東京での観察で、同じ個体どうしが3年間続けて繁殖した例が2例確認されている(多賀1988, 土橋1989)。夜明けに1羽が梢でキッキキキと強く鳴き、そのあと、1羽が一気に飛んで2羽が合流し、一緒に移動し始めたことも観られた。

私は研究のために数年間、コゲラとアカゲラの複数の個体を飼育したことがある。その多くの期間、毎日世話をするためや置き場所の都合で、自宅にコゲラの飼育ケージをおいていた。飼育個体は、私になついで寄ってくるという風ではなかったが、帰宅した時にはかならずキッキキキという声を上げるなど、人に対しても多くの反応を示し、アカゲラの飼育個体とは明らかに異なっていた。上述したようなコゲラの緊密なつがい維持という社会的行動上の特徴が、少しだけ人に対しても現れたのではないかと思う。

### ●控えめなドラミングと強い鳴き声

キツツキはみな、くちばしで木を叩いて音を出し(ドラミング)、なわばり宣言やつがい相手の呼び寄せをする。近年は電柱の金属部分を叩くこともある。コゲラもドラミングをするが、多くの場合その音はかなり控えめ(約0.4秒間に10回程度で音も小さい)で、遠くまで届かない。その代わり、キッキキキという声を張り上げ、この声は遠くまで聞こえるので、アオゲラのピョーという声と同じようにこの声でドラミングの代わりになわばり宣言などの機能を持っていると考えられる。キッキの声は、強く主張する場合の声で、雛が餌をねだるようなときにも、この声に似た声を出すことがある。

### ●どうして伊豆大島や佐渡島にいないのか？

日本列島周辺の多くの島々に生息するコゲラだが、伊豆大島や佐渡島にはいない。どちらの島にも、コゲラにとっては十分すぎるぐらいの森が残っており、ほんの30km足らずで晴ればよく見える対岸の本州の木立ではコゲラがすぐ

に見つかる。佐渡島には、体がずっと大きいオオアカゲラが棲んでいる。伊豆諸島では、本州から大島より遠い三宅島と御蔵島にコゲラが生息している。定着しなかったのか、絶滅したのか、不思議で、興味深い。

### ●都市での巣穴に適した枯枝の伐採

緑の多い公園や学校のキャンパスなどでも、通行人の安全や景観のためという名目で、コゲラの巣穴のあった枝が、次々と伐りとられてしまう。卵や雛がいる巣が伐られる場合もたまにあり、抱卵に至る前にせつかく苦勞して掘った巣穴を失う場合も少なくない。池畔にあった子育て中の営巣木が水の中に倒されて、コゲラのヒナがおぼれ死んでいるのを目撃したこともある。

山地でも、枯れ枝を丹念に調べてみると、コゲラの営巣に適した枯れ枝は意外と少なく、20haほどもあって体の割には大きいなわばりを確保しているのは、営巣に適した枯枝を確保する上で重要だと推測される。

## 6. 参考文献

- 土橋信夫. 1989. 東京都板橋区でつがい個体識別され、繁殖したコゲラ. *Strix* 8: 161-168.
- 石田健. 1997. 日本動物大百科・第4巻「鳥類」, 平凡社, 東京.
- 石田健・多賀レア. 1988. 馬事公苑(東京都内)武蔵野自然林の植生とコゲラの穴木分布. *Strix* 7: 213-230.
- 日本鳥学会. 2001. 日本産鳥類目録(第6版).
- 多賀レア. 1988. 東京都馬事公苑におけるコゲラの営巣記録. *Strix* 7: 291-295.
- 吉井正(監修). 1988. コンサイス鳥名事典. 三省堂, 東京.

## 7. 参考ホームページ

東京大学石田研究室 コゲラの研究のページ  
<http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/~ishiken/japanese/kogera/kogera.html>

## 執筆者

石田 健

東京大学大学院農学生命科学研究科  
 生態システム学専攻 助教授

コゲラがいちばん好きで研究に没頭したい鳥だが、諸般の事情から、他にも興味深い奄美大島の生態系保全と管理、ミズナラの結実特性なども研究している。ツキノワグマを捕獲して調査していたこともある。この原稿を提出したら、コゲラの捕獲・計測調査の放浪の旅に出発する。



2005年春、ノグチゲラ調査の樹上で